

[連載]

博士課程生活講座! ～茂木さんに聞いてみよう～

第5回 先行研究の読み方（後編）

茂木俊伸

若手研究者から院生に送るエッセーです。ちょっと先輩の声に耳を傾けてみませんか？ 何か新しい世界が見えてくるはずですよ。

[企画]

日本語教育・日本語学・言語学に関する

ここ数年のお勧め書籍

大学院生応援企画「ビブリオバトル」(2017年10月1日開催)より

日本語／日本語教育研究会では、2017年10月1日（日）に第9回研究大会のプログラムとしてビブリオバトルを行いました。テーマは「日本語教育・日本語学・言語学に関するここ数年のお勧め書籍」。当日、取り上げられた作品は以下の通りです。

川添愛『働きたくないイタチと言葉がわかるロボット

——人工知能から考える「人と言葉」』

酒井邦嘉『科学者という仕事——独創性はどのように生まれるか』

本田弘之・岩田一成・義永美央子・渡部倫子

『日本語教育学の歩き方——初学者のための研究ガイド』

岡ノ谷一夫『言葉はなぜ生まれたのか』

鈴木孝明・白畑知彦『ことばの習得——母語獲得と第二言語習得』

ビブリオバトルに来られなかった人のために、ここでは各登壇者に報告を書いてもらいました。お楽しみください。

総務委員 岩田一成・建石始

第5回 先行研究の読み方（後編）

茂木俊伸（熊本大学）

このエッセイでは、日本語学・日本語教育学分野の博士課程（博士後期課程）にいる人、または博士課程に進学しようと考えている人に向けて、若手（だと自分では思っている）大学教員が、自分の経験の中で「後輩たちの役に立ちそうなこと」について語ります。

1 はじめに

前回（第4回）は、いわゆる「先行研究」と呼ばれる文献を読むことについて、その大枠をまとめました。今回はより具体的に、探し出した先行研究を「どのように読むか」という方法について、詳しく見ていきます。

研究をしていると、「先行研究（論文）が読めていない」と指摘されることがあります。この場合の「読めた」とは、「論文に目を通した」ことではなく、「論文の内容をきちんと理解できている」ことを指します。書かれていることの表面をなぞっただけの「読んだつもり」は、とても怖いのです。

2 「わかる」と「つなぐ」

論文を読むうえで強く意識したいキーワードとして、「わかる」と「つなぐ」があります。これは、子どもの学力を捉えるための志水（2005）の用語で、それぞれの意味は次のように示されています（同:v）。

- ・わかる：物事をちゃんと分けて捉えることができるか。輪郭のぼんやりとした対象をまとまりごとに区切って認識することができるか。それができなければ、世界はピンぼけのまま、霧がかかった状態にとどまる。
- ・つなぐ：分けられた個々の要素を、今度は、関連づけて把握しなければならぬ。部分部分をつなぐことによって、ひとつの全体として理解するのである。そのことによって、世界は秩序あるものとして、私たちの前に姿を現すことになる。

これらは、大学院での研究活動においても高度なレベルで発揮しなければならぬ能力です。一番の理想は、「聞く」際にそれができる、例えば、口頭発表を聞きながらその場で即座に問題を切り分け、かつ全体をストーリーとして理解し、適切な批評ができることです（院生のときに学会でそのようなやりとりを見て「ふおお」と感動しました）。しかし、このような能力がいきなり身につくわけではないので、時間をかけられる「読む」活動の中で練習する方がいいと思います。

3 しっかり読む（その1）：論文の中をわけてつなぐ

一つ一つの論文を読む際には、まず、個々の段落や節などが何を述べている部分なのかを「わかる」読み方をし、さらにそれらを改めて「つなぐ」読み方をします。伊丹（2001）は、論文を書く際には「虫の目」と「鳥の目」を持つ必要があるとしています。読者として書き手のこれら2つの視点を追体験し、「構造を作っている部品の一つ一つを吟味する」と、「全体を構造的に読む」ことを両立させる、というイメージです。

例えば、論文中の分析の部分では、何をどのように提示し、そこから何を述べているのか、ということ意識します。おおよそ、①「データ（根拠）」、②「解釈」、③「主張」の3つにわければいいでしょう（実際の論文は、これらを明確に区別した書き方をしていないことも多いのですが）。

はじめに、データとして提示されている表や例文そのものに問題がない

かを検討します(①)。次に、それが論文中でどのように解釈され(どのような特徴を示すものと読み取っており)(②)、またそれらに基づいてどのような主張がなされているのか(③)を見ます。

このとき、データそのものに問題がある(例:データの取り方や処理がおかしい)、示されたデータの解釈に問題がある(例:データがそのように読めない)、根拠から妥当な主張がなされていない(例:言える範囲を超えた主張をしている)、というように、おかしなところがどのレベルにあるのかをわけて考えることができれば、評価や批判のポイントが明確になります。

部分の検討が終わったら、それらを流れとして「つなぐ」形で読みます。部分部分の記述が明確であり、かつ全体が無理なくつながったストーリーになっていて論旨が明快な論文が、いい論文だと言えます。

4 しっかり読む(その2):論文と論文をわけてつなぐ

一つ一つの論文は、一つの話として完結するように書かれていますが、「より大きな話」の一部を構成する役割も同時に果たしており、それ以前の研究(あるいはそれ以降の研究)との連続性も持っています。

通常、論文の前半には、先行研究のまとめ(既に分かっていること)と、その論文が明らかにしようとしていること(新しいこと)が書かれています。まず、これらを「わかる」必要があります(この境界が曖昧なのであれば、問題設定自体が曖昧な論文だと言えます)。

両者がわけられているように見えたとしても、先行研究のまとめとして書かれている内容のうち、その先行研究で実際に述べられていることと、それを引用した論文でなされている解釈や位置付けとを「わかる」必要があります。自分の議論に引き付けようとするあまり、誤った読みをしていることもそれほど珍しくないためです。つまり、論文の著者が先行研究を読んでいるのかを評価しながら読むわけです。

読んでいる論文のセールスポイントが明確に見えてきたら、既に「つなぐ」読み方に入っています。新しいことは過去の延長線上にあり、研究の歴史という“線”の上にあるものだからです。つまり、先行研究は個々の

“点”としてわけて読むだけではなく、先人たちがバトンを引き継いできた“線”としてつないで理解すべきものです。

したがって、時には「(直接)書かれていないこと」の理解が必要になることもあります。一見、言及の理由が分からない記述や論理の飛躍に見える部分にも、そのテーマを扱う研究者にとっては常識となっている前提が隠れている場合があります。このような場合、参考文献欄を頼りに、研究と研究のつながりへの理解を深めていくことになります。一つの論文を読みこなすには、元の“線”をたどる勉強が必要になるのです。

さらに、研究の流れの“線”は、1本であるとは限りません。むしろ、さまざまな議論が展開され、いくつかの流れが分かれたり交わったりを繰り返しているのが普通です。“線”をより複眼的に、いわば“面”として理解するためには、論点の整理が必要です。例えば、佐々木・菅生 (2010) の「先行研究対比表」、ガラード (2012) の「レビュー・マトリックス」のような、先行研究を整理するための項目を自分で抽出し (次の表に一例を示します)、全体を俯瞰する形で「見える化」する方法を試してみるとよいでしょう。

表 ヴォイスの誤用に関する先行研究のまとめ (サンプル)

論文	目的	対象	母語	学習歴	データ	結果
田中 (2004)	誤用分析	受身文	英語	1～3年	穴埋めテスト	・主な誤用として ・要因は母語の
鈴木 (2005)	誤用分析	受身文	中国語	1年	作文	・助動詞の欠如 ・要因は母語の
王 (2007)	誤用分析	使役文	中国語	上級	作文 (コーパス)	・助詞の誤用は ・母語の干渉だ
王 (2008)	誤用分析	受身文・ 使役文	中国語	上級	作文 (コーパス)	・共通する誤用と ・要因は特定でき

5 おわりに

先行研究をしっかりと読んで把握した内容は、博士論文の一部としてまと

めることになるため、ここで示したような内容をカリキュラムに組み込み、レビュー論文としてまとめさせる大学院もあるようです。自分の読み方に自信がないという人は、文献紹介の授業や読書会といった、一つの論文をみんなで読む機会を積極的に利用するといいいでしょう。

ただし、ここまでの話はあくまでも、自分の研究のためのトレーニングであり作業です。研究の中心は、時間をかけて考え、最終的にアウトプットすることにあります。インプットはそれを補助する土台作りであり、自分の研究も含めた“線”に自覚的になるためのステップであるという理解が大事です。

参考文献

- 伊丹敬之（2001）『創造的論文の書き方』有斐閣
ガラード，ジュディス（安部陽子訳）（2012）『看護研究のための文献レビューマトリックス方式』医学書院
佐々木嘉則・菅生早千江（2010）「大学院博士前期課程応用言語学専攻における研究法授業の開発」『言語文化と日本語教育』39, pp.6-16. お茶の水女子大学日本語文化学研究会
志水宏吉（2005）『学力を育てる（岩波新書）』岩波書店